

5) 花き作

ランキユラスの促成栽培について

1 試験のねらい

花きの消費が一般化し、種々の生活の場に定着するにつれて、消費者側のニーズも著しく多様化してきている。これら消費動向に対応するため、従来の単一種類の生産から省力的で消費動向にあった有望種類の組合せによる生産に移行することが急務である。こうした中でランキユラスは生産供給が望まれる種類の一つであるが栽培法に不明な点が多いので、球根の催芽冷蔵法、早期植付時期の限界、高冷地育苗による生育促進とその限界等について昭和56～57年の2ヶ年検討した。

2 試験方法

- (1) 球根の催芽冷蔵、ドリーマーエロー、ドリーマースカーレットの2品種を用い、ベンレートT 500倍液に1時間浸漬後、オガ屑パッキンによる湿冷とし、8℃3、4週間、11℃2、3、4週間、14℃2、3週間冷蔵催芽処理を行った。また、冷蔵温度が開花に及ぼす影響をみるため、3週間冷蔵催芽の各区を最低夜温5℃の温室に定植した。栽植密度は20×20cm間隔とし施肥はa当たり化成肥料(8-8-8)窒素で3.0kg、BM熔リン3kg、油かす2.0kgで、pHは6.4に調整した。土壌消毒はバスアミド2.5kg/a施用、ビニル被覆で実施した。
- (2) 冷蔵球の植付け時期、試験(1)に供試した品種にピンクシェード、ホワイトシェードを加え、8℃3週間湿冷した催芽球根を9月10日、21日、10月1日に定植した。栽培は試験(1)と同様にした。
- (3) 高冷地育苗、昭和56年度は試験(1)の2品種を用い、8℃3週間冷蔵催芽球根を直ちに高冷地(鶏頂山標高1,250m)に山上げた。高冷地の育苗期間は8月31日～9月20日及び9月30日、9月14日～9月30日及び10月10日とした。球根は12cmポリポットに植付け、施肥はマグアンプK2gとして、雨除けハウス黒色寒紗1枚張り下で育苗した。山下げ後は30×30cmに定植、施肥はa当たり化成肥料(8-8-8)を窒素で2.5kgを施用、追肥は液肥で窒素0.5kg施肥した。夜温は10月20日から午後10時まで13℃、12時まで8℃、その後5℃の変夜温とした。昭和57年度は2品種に途中の処理からピンクシェード、ホワイトシェードを加え、高冷地育苗期間を9月1日～9月10日及び9月20日、9月10日～9月20日及び9月30日として山下げ時期を早めた。山下げ後は栽培法を変えて試験(1)と同様とした。
- (4) 夜温管理 試験(1)の2品種に浜の名月及び浜の虹を加え、8℃3週間冷蔵催芽後、1月5日に6号深ポリ鉢に1株づつ植付け直ちに最低夜温7℃、10℃、15℃の各温室に搬入し栽培した。施肥は鉢当たりマグアンプK4gを基肥、追肥は液肥(窒素6%)600倍を3回施用した。

3 試験結果及び考察

- (1) 冷蔵温度・期間と催芽の関係 定植に際し、断根あるいは芽の損傷等の障害が発生しにくく、更にその範囲内で良好な生育を示すものを評価標準とし、その値を出葉芽数1～2本平均発芽長1.5～2.5cm、発根数30～40本及び平均発根長3～4cmとして伸長程度を比較した結果、2

品種とも8℃4週間が評価標準に近く、次いで11℃3週間であった。一般に行われている8℃3週間では催芽不足であった。3週間処理各区の生育は栽培室温に近い冷蔵温度の8℃区が到花日数が短く、負の差が大きくなるほど到花日数及び切花本数とも劣る結果となった。

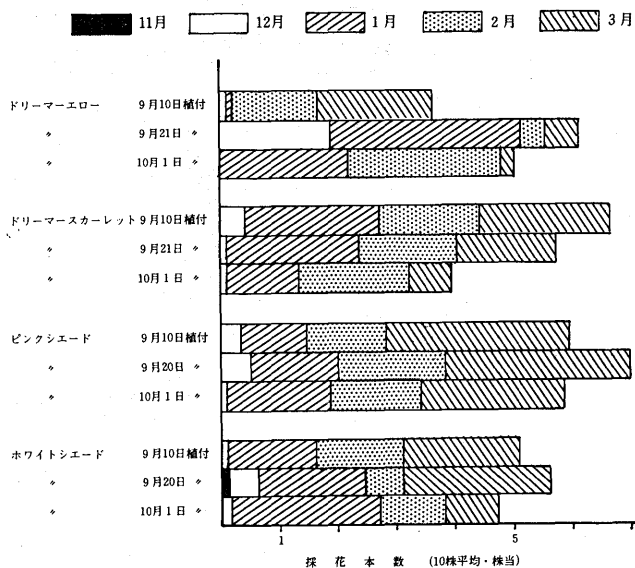
(2) 早期植付け時期の限界 定植初期の栽培室内の気温分布を第1表に示した。9月10日定植は高温によって休眠するとされている25℃以上の日数が12日、30℃を越える日数が延3日あったが、その後は急激に下降し、9月20日では各々7日、2日となり、10月1日では3日0日であった。9月10日定植ではドリーマーエローが著しく高温障害を受け、葉の黄化、出葉数の減少がみられた。時期別採花本数を図-1に示した。総採花数、早期採花数はドリーマースカーレットを除き、9月20日定植が優れたが、年内の早期採花は各区とも少なく、1月から本格的になり3月下旬まで採花できた。

休眠を誘発する高温は最高気温が30℃を越える日が数日続くと起きるとされているが、本試験の結果、気温に対する反応の品種間差があり、気温の年次的変動も考えられるので、安全な定植期は9月20日以後にすべきであると思われる。

第1表 栽培室内の気温分布(10月10日まで・昭和57年)

植付月日	地 表 10 cm 気 温 (℃)						備 考	
	>30	~25	~20	~15	~10	10>		
9月10日	10(3)	65.5(12)	205	381	82.5	0	最高33℃	最低10℃
9月21日	8(2)	37(7)	125.5	232	82.5	0	31.5	10
10月1日		15(3)	41	115	69	0	27	10

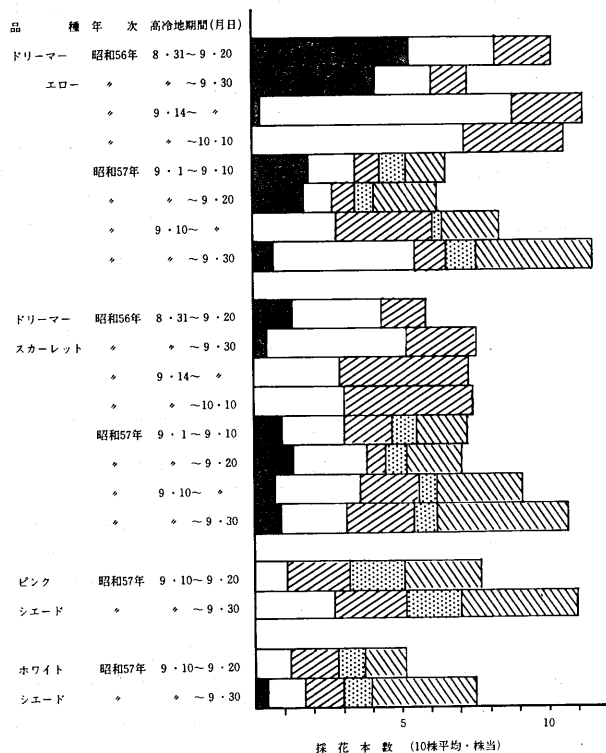
注 延時間、()内は延日数



(3) 高冷地育苗による開花期促進 定植初期の高温を回避する目的で高冷地育苗の新しい作型を検討した。山上げ期間中の気温分布を表-2に示した。期間中30℃を超える日はなく、順調な生育を示した。ランンキュラスは移植による断根が生育障害を起すのでポット育苗としたが、長期間育苗は根ずまりを起しやすく、20日間が限界と思われた。昭和56、57年の各区の時期別採花数を図-2に示した。山下げ時期は平地の好適定植期と同じで、高温障害がなくなる9月20日以後が良く、9月10日より明らかに優れた。また、育苗期間は20日より10日が優れたが、これはポット内の根ずまりによるものと推察された。

第2表 高冷地の気温分布

年 次	高冷地期間 (月日)	地 表 10 cm 気 温 (℃)						備 考	
		>25	~20	~15	~10	~ 5	5 >		
昭和56年	8・31~9・20	8	24	163	215.5	62.5	7	最高28.5℃	最低4.0℃
昭和57年	9・1~9・10	2	28.5	164	36	9.5	0	28.5	7.5
	〃 ~9・20	6	43.5	187	219.5	24	0	29.0	6.0
	9・10~ 〃	4	15	36.5	193	15.5	0	29.0	6.0
	〃 ~9・30	7	34	93.0	326.5	43.5	0	29.0	6.0



高冷地育苗により、到花日数は短縮されるとともに、早期に生育量を確保するため、品種によっては11月中旬から採花が可能で、各品種とも年内の採花が可能であった。

- (4) 夜温の高低と開花の差異 高冷地育苗では昭和56年を13-8-5℃の変夜温とし、昭和57年は5℃恒温としたが、13℃の高温変夜温管理は品種を問わず、短期間に抽だいを繰返し早期に休眠状態となった。5℃の低夜温では3月下旬まで採花が可能であったが、早期採花は少なく、全採花数はほぼ同じであった。

夜温管理試験の結果を表-3に示した。ドリーマーエローは高夜温ほど到花日数が短縮されたが、他の品種は大差がなかった。1番花開花後の3月下旬から、日長の関係で休眠し、その後の反応をみることはできなかったが、以上のことから省エネルギー対策をも考慮に入れて10°~8℃で管理すべきであると思われる。

第3表 夜温が開花に及ぼす影響

品 種 名	最 低 夜 温 (℃)	開花日 (月日)	致花日数
ドリーマー エロー	7	4.17 ± 8	124
	10	4.14 ± 7	121
	15	4.8 ± 9	115
ドリーマー スカーレット	7	4.21 ± 6	128
	10	4.24 ± 4	131
	15	4.16 ± 7	123
浜 の 名 月	7	4.24 ± 6	131
	10	4.24 ± 4	131
	15	4.26 ± 8	133
浜 の 虹	7	4.24 ± 4	131
	10	4.21 ± 5	128
	15	4.24 ± 4	131

4 成果の要約

- (1) 催芽のための冷蔵温度及び期間は一般に行われている8℃3週間よりは8℃4週間がよい。
- (2) 早期植付けの限界は栽培室の気温が25℃前後となる9月下旬であるが、この植付時期では年内の採花は少なく、1月に本格的となる。
- (3) 高冷地育苗によって年内の早期採花が安定して行うことができる。高冷地の育苗期間は20日を限度とし、山下げ時期は9月下旬とする。
- (4) 生育開花は低温で遅延し、高温で休眠が早まる。好適栽培温度は8~10℃である。

(担当者 花き部 中枝 健)